

日本國天皇家論

3章 日本國天皇家

日本書紀は日本國の史実

日本書紀・天智天皇

日本書紀・天智天皇の代に、世界は大きく転換する。まず、これまでの日本國天皇家の歴史をまとめてみよう。

- (1) 日本書紀22巻・「推古天皇」は日本國天皇、「上宮聖王」の代の記録である。
- (2) 日本書紀23巻・「舒明天皇」は日本國の天皇、「山代王」の代の記録である。
- (3) 日本書紀24巻・「皇極天皇」の中心人物は「袁智天皇」である。「山代王」が当時の日本國天皇であった。そして、蘇我氏によって滅ぼされた。その後、蘇我氏を倒して天皇位に即いたのが「袁智天皇」である。
- (4) 大化の改新とは、蘇我氏から國權を奪還した「袁智天皇」による政治改革であった。日本書紀はこの天皇を「天智天皇」としている。だが、「天智天皇」とは、「袁智天皇」であろう。

日本書紀、天智天皇

日本書紀27巻は「天智天皇」の代の記録である。だが、この記録には幾つか問題が見える。

- 655年 斉明即位
- 660年 百濟滅亡
- 662年 白村江敗戦
斉明天皇没
- 663年 天智2年
- 664年 天智3年 26冠位制定(大皇弟)
5月17日百濟の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。
10月1日に、郭務悰等を發(た)て遣す勅を宣たまふ。是の日に、中臣内臣、沙門智祥を遣して、物を郭務悰に賜ふ。10月4日に、郭務悰等に饗賜ふ。
12月12日郭務悰等罷り帰りぬ。
- 665年 9月23日、唐国、朝散大夫沂州司馬上柱國劉徳高等を遣す。等といふは、右戎衛郎將上柱國百濟禰軍・朝散大夫柱國郭務悰を謂ふ。凡て254人、7月28日に對馬に至る。9月20日に、筑紫に至る。22日に表函を進る。
10月の11日に、大に菟道に關す。11月の13日に劉徳高等に饗賜ふ。12月14日に、物を劉徳高等に賜ふ。
この月(12月)に、劉徳高等罷り帰りぬ。是歲、小錦守君大石等を大唐に遣す。
- 665年 送唐客使劉徳高を送る。唐使法聰來日
- 667年 3月19日に、都を近江に遷す。
11月9日に、百濟の鎮將劉仁願、熊津都督府熊山縣令上柱國司馬法聰等を遣して、大山下境

- 部連石積等を筑紫都督府に送る。
 13日に、司馬法聰等罷り帰る。小山下伊吉連博徳・大乙下笠臣諸石を以て送使とす。
 7月栗前王を以て、筑紫率(つくしのかみ)に拝(め)す。
- 668年 天智天皇正月3日即位
 倭姫王を皇后に。蒲生野に狩り。栗前王を筑紫率。高句麗滅亡。
- 669年 正月9日に、蘇我赤兄臣を以て、筑紫率に拝す。山科野で狩り。藤原内大臣死去。斑鳩寺出火
 是歳、小錦中河内直鯨等を遣して、大唐に使せしむ。
 12月又大唐、郭務悰等2千余人を遣せり。
- 670年 天智9年 法隆寺全焼。
- 671年 春正月13日に、百済の鎮將劉仁願、李守眞等を遣して、表上る。
 6月に、栗隈王を以て、筑紫率とす。
 7月11日、唐人李守眞等、百済の使人等、並びに罷り帰りぬ。
 11月10日、対馬國司、使を筑紫太宰府に遣して言さく、「月生ちて二日に、沙門道久・筑紫君薩
 野馬・韓嶋勝婆娑・布師首磐、四人、唐より来りて曰さく、『唐国の使人郭務悰等六百人、送使沙
 宅孫登等一千四百人、総合二千人、船四十七隻に乗りて、俱に比知嶋に泊まりて、相謂りて曰
 はく、今吾輩が人船、数衆し。忽然に彼に到れば、恐るらくは彼の防人、驚き駭(とよ)みて射戦
 はむといふ。乃ち道久等を遣して、預め稍(やうやく)に来朝る意を披き陳さしむ』とまうす」とまう
 す。
- 671年 天智10年 大友皇子太政大臣。栗隈王筑紫率。法興寺に供物(袈裟・金鉢・象牙・沈水香・梅檀
 香)。東宮、吉野へ出家。大友皇子六人の誓い。
- 671年 12月3日、天智天皇、近江宮に崩りましぬ。

国内関係記事と国際関係記事を抜き出して列挙してみた。白村江敗戦後、664年5月17日、百済の鎮將劉仁願が朝散大夫郭務悰等を派遣して、「表函と獻物」を献上した。この時、日本書紀の皇暦では天皇はいない。

662年 斉明没

664年 5月17日百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。

668年 天智即位

未曾有の国難の時期、6年間、天皇はいない。では、日本國の外交は誰が担当したのか。

664年5月17日百済の鎮將劉仁願、朝散大夫郭務悰等を遣して、表函と獻物とを進る。

665年10月の11日に、大きに菟道に關す。

11月の13日に劉徳高等に饗賜ふ。

12月14日に、物を劉徳高等に賜ふ。

これらの外交記事は、国王の存在を前提としている。国王がいない日本國に対して、唐皇帝の国書を持参したとは考えることはできない。また、先勝國の軍使に対して、「菟道」で「關」したのは、敗戦國の日本國天皇であろう。日本書紀が記すように、「662年、斉明没」から「668年、天智即位」までの6年間、皇太子が即位をしないで政權を運営したことが史実であったとするならば、それは日本國天皇家の史実ではない。

日本書紀は、天智三年(664)に、朝廷の冠位変更の記事を載せている。

三年(664)春二月己卯朔丁亥(9日)に、天皇、大皇弟に命して、冠位の階名を増し換ふること、及び氏上・民部・家部等の事を宣ふ。其の冠は二十六階有り。大織・小織・大縫・小縫・大紫・小紫・大錦上・大錦中・大錦下・小錦上・小錦中・小錦下・大山上・大山中・大山下・小山上・小山中・小山下・大乙上・大乙中・大乙下・小乙上・小乙中・小乙下・大建・小建、是を二十六階とす。前の華を改めて錦と曰ふ。錦より乙に至るまでに十階を加す。又前の初位一階を加し換へて、大建・小建、二階にす。此を以て異なりとす。余は並に前の依なり。其の大氏の氏上には大刀を賜ふ。小氏の氏上には小刀

を賜ふ。其の伴造等の氏上には干楯・弓矢を賜ふ。亦其の民部・家部を定む。

664年に、冠位を二六階に変更した朝廷は日本國天皇家である。日本書紀は、「大皇弟」が実施したと記録を残している。「天皇、大皇弟に命して」と記録しているように、664年には「天皇」が在位している。「662年斉明没」から「668年の天智即位」まで天皇位は空位という記述と矛盾する。

唐大使に対して対応を苦慮したのは日本國天皇であった。この国難をいかに乗り切るか、日本國天皇は悩み抜いたことであろう。唐侵略によって百済は、既に、660年滅亡していた。日本國の運命は日本國天皇の肩にかかっている。

斉明紀・分注

伊吉連博徳書に云はく、庚申の年の8月に、百済已に平(ことむ)けて後に、9月12日に、客(まらうと)を本国(もとのくに)に放(ゆる)す。19日に、西京(長安)より發つ。10月16日に、還りて東京(洛陽)に到りて、始めて阿利麻等(ありまら)5人に相見ることを得たり。11月1日に、將軍蘇定方等が為に捉(か)すいられたる百済の王より以下、太子隆等(こにせしむらうら)、諸(もろもろ)の王子(せしむ)13人、大佐平沙宅千福(だいさへいさたくせんふく)・國辨成(こくべんじょう)より以下37人、併せて50許(ばかり)の人、朝堂(みかど)に奉進(たてまつ)る。急(にわか)に引(み)て天子(みかど)に趨向(ゆ)く。天子恩勅(めぐ)みて、見前(みまえ)にして放着(ゆる)したまふ。19日に、賜勞(ねぎら)ふ。24日に、東京より發(た)つ。

遣唐使・伊吉連博徳一行は、百済への軍事行動のため長安に留め置かれていた。百済が平定され、帰国の許しがでる。そこで洛陽に還ってきた。その時、ちょうど、唐の都に連行されてきた百済王家の人々の姿を見た。高句麗も668年に滅亡することになる。日本國天皇家が同盟を結んでいた二つの国家が共に滅び去った。

日本國天皇は671年に亡くなった。困難で過酷な政權運営だったであろう。

日本書紀・天智天皇は日本國天皇家の天皇

日本書紀・「天智天皇」は日本史上、最も優れた指導者の一人といっても過言ではない。国家存亡の危機に直面し、大国、唐から日本列島を救った功労者である。しかし、日本書紀には唐の客が度々来た記事はあるが、交渉に関する記事は全くない。日本國天皇の言葉も全く記載されていない。また、日本國天皇家の外交文書も全く掲載されていない。國の危機に外交を担った外務大臣、栗前王、蘇我赤兄臣の活躍も描かれていない。

何故か。日本書紀を編纂したのは持統天皇である。その編纂の中心を担った史官は、天武の九州天皇家の史官であった。彼らは九州天皇家の歴史には通じていたが、日本國天皇家の歴史は、残されたわずかの史料に頼って書くしかなかった。唐との外交は全て日本國天皇家によって行われ、九州天皇家は係わりがなかった。故に、九州天皇家出身の日本書紀史官は日本國天皇の言葉も、日本國天皇の苦悩も書くことができなかったのである。

日本書紀・「天智天皇」は日本國の天皇である。歴代の中で最も偉大な天皇の一人である。日本書紀27巻「天智天皇」は最も輝かしい一巻であるべきである。ところが、日本書紀27巻はその様な位置にはない。

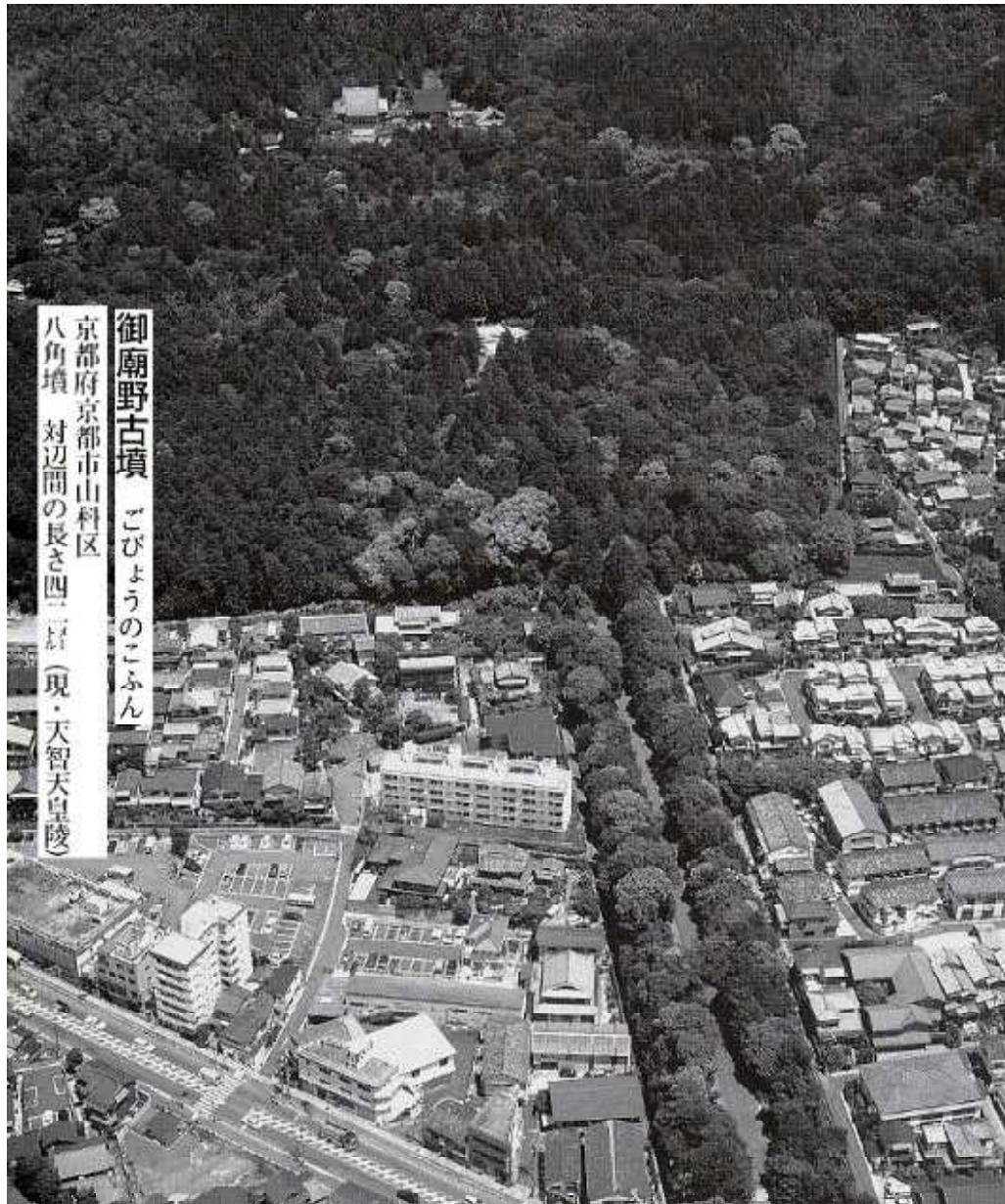
「近江遷都」、「法興寺に供物」、「法隆寺全焼」等、これらの出来事の舞台は関西である。近江遷都によって疎かになった飛鳥では法隆寺が全焼した。

法興寺に供物(袈裟・金鉢・象牙・沈水香・栴檀香)

「法興寺」は現在の飛鳥安居院の地に日本國天皇・上宮聖王が建立した国立寺院である。その寺に供物した天皇は上宮聖王の流れを汲む日本國天皇家の天皇である。これらの出来事の舞台は関西の古代国家、日本國である。日本書紀・天智は上宮聖王以来日本を統治してきた日本國の天皇である。

山科天智天皇陵は日本國天皇の陵

京都市山科に天智天皇陵が存在する。この陵が唐との敗戦という国難に立ち向かった日本國天皇の廟である。



(inoues.net/tenno/tenchitenno.html)

万葉の「近江天皇」は九州天皇家の天皇

日本書紀・天智天皇は日本國天皇である。古代関西に神武を始祖とする天皇家が存在したという古代像はまちがいである。古代関西に存在した天皇家は日本國天皇家である。九州天皇家の歴史記録である「古事記」は九州が舞台である。

万葉集に「天智天皇」が詠んだと云われる歌がある。だが、万葉集は「近江大津宮の天皇」と題詞に書いているが、「天智天皇」と書いているわけではない。万葉集の「近江大津宮の天皇」とはどのような人物なのか。この天皇の歌と天皇と関わりのあった人々の歌を読んでみよう。

“鏡の山に”

山科の御陵より退き散くる時、額田王の作る歌一首 155番歌

やすみしし わご大王の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に 夜はも 夜のことごと
晝はも 日のことごと 哭のみを 泣きつつ在りてや 百磯城の 大宮人は 去き別れなむ

香春町に「鏡山」がある。その由緒には仲哀天皇、神功天皇の説話がある。神功皇后が新羅征討に向かった時、必勝を祈願して手鏡を奉納された。鏡山は手鏡の形をしている。ゆえに「鏡山」と呼ばれる。

仲哀天皇は神功皇后と共に熊襲を御征伐になられたが、やがて陣中に崩ぜられた。皇后は熊襲の叛服常なきは新羅の後援によるものであると御親ら男装し舟師をひきい新羅に向はせられた。

その途路、此の岡に天神地祇を祭り必勝を祈願し、皇后の御魂を鎮め給い御鏡を祀り崇め給いしが、御社の草創と伝えられる。祭神は神功皇后を主神とし後仲哀天皇を祭祀せらる。

皇后御鎮座(西紀二七〇年)より此の方一千七百余年を関する御宮居である。

昭和六十三年一月吉日 宮司

(境内入口社号碑裏面由緒書より)



祭神は神功皇后と仲哀天皇である。私が宮司さんに直接お聞きしたお話では、この古墳は「手鏡」の形をしているから、「鏡山」と云うのだということである。田んぼの真ん中にぽつんとあるこの岡は、岡ではなくて、古墳である。そして、古墳の北側の集落の人々が代々この陵を護ってきたと聞いた。それは、この古墳が天皇陵だからである。

祭神として祀られている仲哀天皇・神功皇后の陵はこの鏡山ではない。

御陵は河内の恵賀の長江に在り。皇后は御年一百歳にして崩りましき。狭城の楯列の陵に葬りまつりき。
(古事記・仲哀天皇)

仲哀天皇陵は河内である。この河内は九州天皇家の河内、小倉南区である。香春・鏡山古墳は仲哀天皇・

神功皇后の陵ではない。この古墳の被葬者が祭神とされる仲哀天皇夫妻でないとするれば、一体誰か。

額田王が「御陵仕ふる 山科の 鏡の山に」と詠った、九州天皇家の「近江天皇」の陵がこの鏡山古墳である。

額田王は九州天皇家の歌人である。

日本書紀・天智天皇は668年即位して後、古人大兄皇子の女、倭姫王を皇后とする。他に四人の妃を持った。

「蘇我山田石川麻呂大臣の娘・遠智娘」「遠智娘の弟・姪娘」「阿部倉梯麻呂大臣の女・橘娘」「蘇我赤兄大臣の女・常陸娘」

「妃」は全て、日本國天皇家の大臣の娘である。他にも「天智天皇」の子どもを産んだ女性がいる。「忍海造小龍の娘・色古娘」「栗隈首徳萬の娘・黒媛娘」「越の道君伊羅都賣」「伊賀采女宅子娘」である。これらの「妃」は日本國天皇家の有力豪族の娘である。しかし、ここに歌人、額田王の名はない。

万葉集の天武の歌の中で、「人妻」と歌われた額田王は九州天皇家「近江天皇」の妻である。日本書紀・天智天皇の妻ではない。故に、天智紀の妃として登場しないのである。

万葉・「近江天皇」と日本書紀・天智天皇とは別人である。日本書紀・天智天皇の物語は関西に実在した日本國天皇家の物語である。一方、万葉の「近江天皇」の歌舞台は北九州である。日本書紀・天智天皇に万葉歌人・額田王が登場することはない。この有名な万葉歌人、額田王は日本書紀には一切姿を見せず、万葉集にのみ登場する。額田王も「近江天皇」も九州天皇家の田川市、香春町、小倉南区で歌を詠んでいたのである。

“大和なる大島の嶺に”

日本書紀29巻(天武天皇)では、天武12年、7月、「鏡姫王」が亡くなる時、天武は丁重にお見舞いをしている。「鏡姫王」は額田王の母といわれる。天武は額田王との間に十市皇女を産んでいる。「鏡姫王」は天武にとって義理の母である。そして、「近江天皇」にとっても義理の母である。その「鏡姫王」に贈った「近江天皇」の歌が万葉集にある。

万葉91番歌 天皇、鏡王女に賜ふ御歌一首
妹が家も 継ぎて見ましを 大和(山跡)なる 大島の嶺に 家もあらしも

大意 あなたの家をいつも見るのができたらなあ。大和の大島の嶺に家があったらなあ。(頭注91)

万葉92番歌 鏡王女、和へ奉る御歌一首
秋山の 樹の下隠り 逝く水の われこそ益さめ 御思よりは

大意 秋の山の木の下を隠れて流れて行く水の水かさが増すように、あなたの思い下さるよりは、私の方こそ一層多く思いをお寄せしておりますように (頭注92)

大和(山跡)なる 大島の嶺に ……この文意が古来難解である。大和を奈良とすれば、「大和にある大島」が理解できない。普通に考えれば「大島」は何ととっても島である。「頭注」は「高安山か」と書く。しかし「高安山」は誰が見ても大阪平野を見下ろす山である。この山に登って、「ああ、この山は……」と言う人はいても、「ああ、この大島は……」と言う人は一人もないであろう。もし、「大島」を「島根」と歌っていれば、「高安山を詠んだのだ」ということもできる。「島根」は「島嶺」である。「高安山を指す」と云ってもいい。しかし、この91番歌は「大島」である。島を詠んでいると考えるほかない。

では、「奈良に大島があるか」と、問えば……むろんない。奈良は盆地である。盆地に島はない。この歌は奈良・大和では理解不可能な歌である。万葉91番歌の作歌者の天皇は奈良に居たのではない。天皇は九州天皇家の「近江大津宮(小倉南区)」にいた。意味は次のようになる。

倭(やまと)の國の大島にあなたの家があれば、私は宮からいつもあなたの家を見ることができるのに

歌は自己表現、またメッセージである。古代の歌は特定個人へのメッセージである。現代歌のように不特定多数を想定して歌っているわけではない。天皇のこの歌は、「こちらへの宮に引っ越しておいで」、と鏡王女を誘ったメッセージ歌である。

では、「倭(やまと)の大島」とは、どの島か。万葉の「近江天皇」の宮は「近江大津宮」である。「近江」とは小倉南区の曾根の海をいう。「大津」とは小倉南区を流れる竹馬川を遡ったところに存在した湊である。九州天皇家「近江天皇」の「大津宮」は、小倉南区長野に存在した。天皇はこの宮で「倭(やまと)の國」を統治していた。鏡王女へのこの歌は、「小倉南区の大島に出ておいで」というメッセージである。万葉・「近江天皇」のこの歌は天皇が曾根の海に面した小倉南区小倉に居るという史実の上で成り立つ歌である。奈良では成り立たない。このメッセージに、鏡王女が答えている。

お誘い下さってありがとうございます。私は、あなたが思ってくださいる気持ちより多く思いを寄せておりますが、でも、秋山の水が樹の下を人知れず流れて行くように、ここでひっそり暮らしてまいります。

これが、鏡王女の答えであった。小倉南区への転居を断って、旧都・倭(田川市)に残ると答えたのである。

“香具山は”

中大兄(なかつおほえ)の三山の歌 13番歌

香具山は 畝傍雄雄しと 耳成と相争ひき 神代より かくにあるらし いにしへも しかにあれこそ うつせみも つまを 争ふらしき

<原文> 高山波 雲根火雄男志等 耳梨与 相争競伎 神代從 如此に 有良之 古昔母 然に 有許曾虚 蟬毛 孀乎 相格良思吉

原文では「高山(こうやま)」である。訓読みは「香具山」となっている。日本文学大系補注13には詳しい解説があり、その解説によれば、「高山」は「香具山」と読みかえることができる。確かに、「香具山」を「香山」とも書く。



万葉集260番歌は、香具山を、「天降りつく 神の香山 打ち靡く」と、歌っている。この歌の「香山(こうや

ま)は、「高山(こうやま)」と書き改めることができる。中大兄も「香山」を「高山」と歌った。いずれにしても、「高山」とは香春町にある畑の畝の形をした三つの山の一つである。香春町の三山は「一の岳」、「二の岳」、「三の岳」とある。写真は、西南から撮ったもので手前が「高山」、真中が「畝火」、向こうが「耳梨」である。

中大兄は、「雲根火雄男志」と歌っている。「雄男」は男性に対する形容である。この山には「男神」が祀られている。両サイドの「耳梨」と「高山」には「女神」が祀られている。歌の設定と合う。この歌は九州・香春のこの山を見て詠まれたものである。

播磨風土記は九州天皇家の「播磨國」の風土記

中大兄が、「神代の前例」としている説話は、播磨風土記にある。

播磨国風土記 揖保郡・上岡の里

土は中の下なり。出雲の国の阿菩の大神、大倭の国の畝火・香山・耳梨、三つの山相闘ふと聞かして、此を諫め止めむと欲して、上り来ましし時、此处に到りて、乃ち闘い止みぬと聞かし、その乗らせる船をふせて、坐しき。故、神阜と号く。阜の形、ふせたるに似たり。

この説話は天照御神が大国主命に「國(葦原中国)譲り」を強要する以前のもので、天孫降臨以前の出雲王朝神話である。播磨國も「大倭三山」も「出雲」も全て九州天皇家の古代國である。

出雲王朝の時代、「倭國(香春町)」の「大倭の三山」が争った。出雲王朝の王者「出雲の国の阿菩の大神」が仲裁のため、「倭國(香春町)」へ、船でやって来るようになった。ところが、途中、「上岡」まで来たとき、もう決着したか、どちらかが諦めたかで、三角関係の縄は解消したと、聞いた。アホらしくなって、そこで船をひっくり返して休んだというものである。

“無駄足だった。男女関係のもつれには介入するものではないな。”と、ため息が聞こえてくるような説話である。

「出雲の國」とは「小倉南区」、「倭(やまと)」とは「香春・田川」である。「阿菩の大神」は古代出雲から周防灘を船で南下して行橋市までやって来た。そこから、陸路を「倭(香春)」まで進もうとした。ところが、行橋市の港の入口に存在する「簑島」までやって来たら、「もう、争いは収まりました」と、報告を受けたのである。やれやれと船をひっくり返して休んだという説話である。なるほど、「簑島」は「神阜と号く。阜の形、ふせたるに似たり」と、風土記が書くように、船をひっくり返した形をしている。

香春岳の頂上に祀られていた神は、一ノ岳には「辛国息長大姫大目尊」、二ノ岳には「天忍穗耳命」、三ノ岳は「豊比口羊尊」である。一ノ岳と三ノ岳は女神、二ノ岳は男神である。この説話に合う配置で、中大兄はこの説話をよく知っていて、若き恋の悩みを歌に込めたのである。

“菫草さす 紫野行き”

額田王と天武の間には有名な歌がある。

天皇の蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌 20番歌

あかねさす 紫野行き 標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

皇太子の答へませる御歌 21番歌

むらさきの にほえる妹を 憎くあらば 人妻ゆえに われ恋ひめやも

万葉集人気No.1の歌である。4つの「キ」の音がこの歌にまっすぐな力を与えている。3つの「ノ」の音が「キ」の勢いを柔らげている。2つの音の交響がこの歌を名歌にしている。

この歌は恋の歌であるが、大人の落ち着いた恋の歌と感じる。どうしようもなく恋い焦がれている若い男女の恋の歌という感じはない。嘗て、子をなしながら別れざるをえないお互いの運命を受け入れ、未だお互いを 気

遣っている成熟した人間の愛を感じさせてくれる。

人妻ゆえに われ恋ひめやも

この下の句をどう読むか？これが結構難しい。「萬葉集(日本古典文学大系)・補注21」を見てみよう。

人妻という単語だけで、当然、他の人間がそれを恋うてはならないことが示される。従って、自分がその人を恋するはずはないのである。しかも、自分は恋している。そこで「紫草のように美しい面立ちのあなたが憎いならば、あなたはすでに恋してはならない人妻ダノニ私が恋するということがあるものものか」という表現になる。

補注21の云わんとすることは何か。「ユエニ」を「ダノニ」と解せよ、というのであるが、正直誠に分かりにくい言い回しである。「人妻であるのに、恋してしまった。それは憎くないからだ。憎ければ恋することはない。何故なら人妻だからだ。」

人を恋するのに憎しみで恋する人はいない。相手が人妻であろうとなかろうと、人を恋するのは愛するユエである。また、人妻ユエに恋するのではない。補注21の解説は歌の意とは少し異なるように思える。

「人妻ゆえに」は普通に解釈して「人妻であるからという理由で」という意味であろう。二人の関係を考えると「人妻ゆえに」は、「今は人妻になってしまったからといって」と、云う気持ちが込められている。「憎くあらば」は自分の元を去らざるをえなかった額田王の悲しみを理解した上での天武のいたわりの言葉である。今は天智の妻となってしまう額田王に憎しみの感情を持っていない。むしろ、憂えている。

貴女が私の元を離れ天智の妻になってしまったからといって、私が貴女を憎むなんてことはありませんよ。私の愛は変わりません。貴女は私にとっていつまでも“紫のにほえる”人ですよ

これが天武のメッセージであった。二人はいつまでも恋の感情を持ち続けている。もう若くなく、天智の下で孤独であったと思われる額田王は、さぞ、嬉しかったであろう。万葉・「近江天皇」の宮は、近江大津宮(小倉南区・長野)である。

この「近江宮」からそれほど離れていない小倉北区に「紫川」が流れている。この川の名前が額田王が詠った「紫野」に由来することは当然であろう。また、20番歌の題詞は「天皇の蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌」と書いている。「近江天皇」の猟場の名前は「蒲生野」である。小倉北区には、「蒲生」という地名が現在も残っている。

天武は額田王を案じて遠くから袖を振って “変わりないか？幸せにやってるか？” とメッセージを送った。天皇の妻に声をかけて、親しく話すなど許されることではなかったであろう。袖を振るのが精一杯の行為であった。額田王はそれさえ心配して応える。

ここは絹布の染料である「紫草」を栽培している直轄地ですよ。「野守」を置き、管理厳しくしています。私は元気ですよ。だから心配しないで。そんなに袖を振っては、野守の役人が見てしまうでしょう。

額田王は同じように天武を案じて歌を返した。しかし、天武の返歌には隠れた意味が存在するように思える。この時すでに天武は、兄である「近江天皇」より上位にいたように思える。歌はそのことを誇示しているように見える。

小倉北区蒲生

